

ご挨拶

- 財団法人 精神・神経科学振興財団の
発展を祈念して -

国立精神・神経センター
総長 金澤 一郎



財団法人 精神・神経科学振興財団のニュースレターの創刊おめでとうございます。国立精神・神経センターの本来の使命を果たす上でも、財団にはいろいろと協力をお願いしたいと考えておりますので、財団の今後の発展を期待しております。ニュースレターの発刊に際して、何か思ったことを書くようにと理事長からお誘いを受けましたので、一言、日ごろのお礼とセンターが今抱えている問題点をまとめてご報告することにいたします。

私が、現財団理事長でセンターの名誉総長であります高橋 清久先生から引継ぎを受けて総長を拝命いたしましたのは、平成15年4月1日でした。ちょうど4年前です。その頃の最大の課題は、何と言っても「武蔵地区と国府台地区の統合一元化」問題であり、武蔵地区にとってみれば「武蔵地区再開発」問題でした。時あたかも、間違いなく順番から言えば我々の後であったはずの国立国際医療センター病院の建て替えの話が急浮上してきていて、順番を飛ばされた形の我がセンターの心中には穏やかならぬものがありました。

そこで私が考えたのは、それまでは研究所と武蔵病院の方々が知恵を絞って作り上げたけれども、厚生省(当時)からはさっぱり色よい返事がもらえずに、結局はお蔵入りに近い状態、つまり本省には取り上げてもらえなかった「将来計画案」を踏まえながらも、もっと理念的なところを強調した案を自分で書き、これを「ルネッサンス計画」と名づけることでした。総長になってから数ヶ月はこれにかなりな時間を使った覚え

があります。ルネッサンスと名づけたのは、自分としては「再生」「生き返る」という意味をこめたのですが、口の悪い連中は「それなら今は死んでるのか?」と言い、私はムツとした覚えがあります。でも考えてみると、確かに自分でも、武蔵病院は「死んだも同然」であると思った時期がありましたから、あまり文句も言えないのでした。

幸いにも、そのルネッサンス計画を引っさげて改めて本省の扉を叩いてみましたところ、ちょうどタイミング的にも良い時であったのだらうと思いますが、重い扉が少しずつ開き始めました。平成15年から16年にかけてのことです。そしてついに我々の手を離れて本省の指導により、平成16年から17年にかけて「国立精神・神経センター将来構想策定調査委員会」が開かれ、その結論として武蔵病院と国府台病院を統合一元化し、国府台地区を民間に売却して、それを原資にして武蔵地区に新病院を建築する(我々としては、新病院建築だけでなく、武蔵地区再開発と理解しています)ことが医政局長に答申されました。平成17年6月のことです。それ以後、民間からの応募の中から最も適切な施設が、別に作られた委員会によって選定され、平成19年5月の統合一元化というタイムスケジュールも決まり、粛々と事が進むものと思っていました。

ところが、政治的圧力によってこの計画、つまり国府台病院を某施設という民間に売却することが頓挫してしまいました。これは我々にとって重大事で、計画の根幹が崩れた思いをしました。同時に、この激震には5年後に6つのナショナルセンターを独

立法人化するというとんでもない「おまけ」がついていました。それからしばらくは放心状態でしたが、我々はそのショックから雄々しく立ち上がりました。ナショナルセンターの使命を全うするためには通常の法人ではダメだと言い、一方、武蔵地区の再開発の計画も現実を踏まえて多少の変更を加えながら着々と進め、凜とした態度を崩さず頑張ったところ、平成18年12月27日、本省から「武蔵病院新棟基本設計」を外注するための官報公告がなされたのです。これで、武蔵地区の再開発に向けて全てが動き出したこととなります。小さな1歩のように見えますが、我々にとっては大きな1歩です。

この他にも大きな問題として、こころの健康科学や精神・神経研究委託費等の事前評価や研究費配布等を当センターで引き受ける、いわゆるファンディング・エージェンシー化の問題があります。「こころの健康科学の推進事業」も財団にお引き受けいただくことになりました。更には、いわゆる精神科医療の研修の多くは財団に行っていたいています。このように、当センターの様々な機能を発揮できるのは、財団の活躍があって初めて可能なのだということを我々はよく理解しておく必要があります。

今後もこの結びつきを深めて、国立精神・神経センターと財団法人 精神・神経科学振興財団とがともに大きな飛躍をとげることを期待してご挨拶に代えさせていただきます。

金澤 一郎